

# 「今、光っていたい」(特別の教科 道徳)

所要時間 45分～90分

対象 中学生以上

## 1 主題名 「今、光っていたい」

(「今、光っていたい」(あけぼの中学生版 人間に光りあれ))

内容項目 D(22) よりよく生きる喜び

人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることの喜びを見いだすこと。

## 2 ねらい

日航機墜落事故の悲劇で亡くなられた「愛子さん」の父親が書いた「今、光っていたい」を読むことで、「愛子さん」を取り巻く人々の中に「人として生きるすばらしさ」が息づいていることを感じとるとともに、互いに信頼と愛情を持つことで、同和問題という大きな課題の解決の実現に努めたことに気づく。

## 3 準備

- ・資料:「今、光っていたい」(あけぼの中学生版 人間に光りあれ)
- ・補助資料:中学生人権作文「御巢鷹山を訪ねて……」

## 4 進め方

	活動の流れ(指導者の教示、子どもの反応・行動)
導入	1 日航機墜落事故の概要について、インターネットの資料や関連書籍、新聞記事等から知る。
展開	2 「今、光っていたい」を読む。 3 一番印象に残ったことはどんなところか話し合う。 (1) 印象に残ったところを一人一人がワークシートにまとめる。 (2) 一人一人が感じたことを自由に語り合う。 4 田中さんや愛子さんの婚約者の気持ちを整理する。 (1) 田中さんは、以前は同和問題についてどんな心配をしていたか。 (2) 婚約者や彼の父親は同和問題に対して、どんな考えを持っていたか。 (3) 婚約者や彼の父親、友人達の人としてのすばらしさについて確認し合う。
振り返り	5 学習を通して気づいたこと、感じたことを伝え合う。 (補助資料:中学生人権作文「御巢鷹山を訪ねて……」を必要に応じて読み合わせる。)

## 留意点等

○さらに問題を掘り下げて考えるために、次のドキュメンタリー資料を活用する展開も考えられる。

<啓発ビデオ>

- ・『ドキュメンタリー・結婚』 33分 【平成9年(1997年)作品】  
企画:長野県同和教育推進協議会 制作:信越放送(SBC)株式会社

(参考:『参加体験学習プログラム』(人権教育調査研究委員会))

# 「今、光っていたい」

……娘の遺<sup>のこ</sup>してくれたもの……

田中 蔚<sup>しげる</sup>

花嫁の 衣装を着せて

茶毘<sup>た び</sup>にふせし

遺骨<sup>ほ ね</sup>を抱きて など微笑<sup>ほ ほ え</sup>める

1985年（昭和60年）8月12日、娘が日航機墜落事故で遭難した。娘は中学校で体育の教師をしていた。御巢鷹山<sup>お す たかやま</sup>の山奥で傷があれば自分で止血し、夜露を飲んででも必ず生きているにちがいない。そう信じて現地へ駆けつけた。事故は凄惨<sup>せいさん</sup>を極め、想像を絶していた。

バラバラ遺体の中を気が狂ったように探し求めてわが子にやっと巡り会えたのは7日目であった。

「どんなに変わり果てた姿であろうと、せめて、一晚わが家の畳の上に寝かせてから葬<sup>ほうむ</sup>ってやりたい」という妻を説いて遠い高崎の地で茶毘<sup>た び</sup>にふした。来春の結婚に夢見たであろうウエディングドレスを着せ、好きだったテニスのボールを左手に握らせて……。

一筋の煙と共に白骨と化したその遺骨を抱きしめたとき、とめどなく流れる涙と共に「よう帰ってきたのう」と思わずほほえんだ私。

一緒に同道した婚約者の姿がいじらしかった。彼はこの事故の一カ月ほど前に「愛子さんとの結婚を認めてください」とわが家を訪れた。「うちは同和地区ですよ」と言う。「愛子さんから聞いています。両親がお盆にお願いに来る筈<sup>はず</sup>です」これが彼と交わした最初の会話であった。

そして奇しくも遺体収容の藤岡市の体育館で両家の親が対面した。私が同和問題に触れた時、彼のお父さんは「私は教師です。少なくとも人さまに平等を説く人間として自分を偽<sup>いつわ</sup>るようなことはようしません」と言われた。私は返す言葉もなかった。

娘の縁談を聞いた時「それでも親戚の中には反対の人がいるかも」とか「娘が先々思い悩むのでは」と、あれやこれやと思い過ごしていた自分が恥ずかしかった。こんなお父さんや彼だからこそ「わたし部落の生まれなんよ」と重いことばを打ち明けることができたのだろう。「これからも息子をお宅の家族の一員に加えてお付き合

いさせてください」とお父さんはおっしゃった。

お盆休みの休暇が切れ、いくら勧めても彼は職場に帰ろうとしなかった。疲れはてた妻の肩をもみ私に濡れタオルを絞り、買い物や電話の対応や遺体の確認に奔走してくれた。

四十九日がすんでから彼は畳半分もある大きな娘の肖像画を持ってきた。娘の面影が、鮮やかに描かれていた。「仕事の合間に毎晩、絵筆をとる間だけが心安まる時なんです。愛子さんに会いたくなればこの絵を見に来ます」と。四十九日を一つの区切りに思いを断ち切らせたいと願った私だったのだが。

十一月の連休に彼は泊まりがけでやってきた。生まれてはじめての稲刈りや脱穀を手伝ってくれた。「これで来年田植えをすれば僕も一かどのお百姓さんになれますかね」とも言った。あれから数ヶ月、その田植えの時期がやって来る。

遺体の見つかるまでの一週間、娘が神戸を発つ時の衣装や持ち物、歯形などの情報を持って数人の友達が阪神や和歌山から駆けつけてくれた。いずれも大学時代やその後のスポーツ仲間だった。葬式が済んでからも四国や岡山から友達が訪ねてくる。友情とは何なのか。愛とは何なのか。ひとかどに愛の道を人に説いてきた私に果たしてそれが出来るのか。愛とは人に説くことではなく行うことなのだ。それを私は教えられた。

人の命には限りがある……

だからこそ 自分の思うようにいきたい……

人は軽く十年先、二十年先を口にするけれど

そのときを大切にしなければ……

今 光っていたい……



テニスの好きだった愛子さん  
西脇高校から全国インターハイ出場  
☆写真は「あけぼの」人間に光りあれ

娘の絶筆である。「今、光っていたい」の思いを遺して、娘は帰らぬ人となってしまった。朝夕仏壇に合掌するたびに、唱えるべきお経を知らない私はこの詩を口ずさみながら、水平社宣言の最後にある「人の世に熱あれ、人間に光りあれ」の西光万吉の言葉とが重なりあって、今日も静かに手を合わせる……。

人を愛し愛される人に 育てよと

名づけし「愛子」 空に散り逝く

書名 『感性に問う人権啓発』  
著者名 田中 蔚  
出版社名 (株) 明石書店

今年の夏、私は貴重な体験をした。昭和六十年八月十二日、群馬県御巢鷹山に東京発大阪行きの日航ジャンボ機が墜落した。死者は航空機事故最悪の五百二十名……。私はこの事故をお盆のニュースの中で、毎年ぼんやり見ているだけだった。「自分には関係ない。遠くの話だ。」と思い続けていた。

しかし、そんな私の考えは、この夏、大きく変わった。夏休みに入ったばかりのある日、母が田中蔚さんという方の手記を見せてくれた。「娘ののこしてくれたもの」と題されていた。何気なく読み始めたが、読んでいくうちに、かぁ一と心が熱くなった。田中さんはこの航空機事故で娘の愛子さんを亡くされていた。しかも愛子さんは、この事故に遭わなければ、春には結婚されるはずだった。幸せの絶頂でこの世を去ってしまった愛子さんは、実は被差別部落出身。部落差別はなくなったように言われるが、家の結びつきが強い日本では結婚に際して、部落を理由に反対する人がまだいるらしい。愛子さんは婚約者に自分は部落出身であることを告げていた。また、それを聞いた婚約者のお父さんも「私は教師です。人に平等を説きながら自分を偽るようなことはできません。」と二人の結婚を祝福されていた。

話は変わるが、夏休みに市内の中学生が集まって開かれる人権交流学習会に、私は参加した。その中で、市内の女子高生が「被差別部落出身」を理由に、彼の母親から交際を反対されたという話が報告された。その母親は彼女の身元を調べたり、「何で黙っていたのか。」と彼女を責めたり、「付き合わせられへん。」と交際に反対したそうだ。さらにあきれたことに、彼までも「なんで黙ってたんや。もう付き合えん。」と言ったそうだ。差別はいけないと誰でも知っている。しかし、実際自分にふりかかってくると、こんな愚かなことになる。これが今の差別の現実なのだ。

この話と重ねてみても、愛子さんたちは差別を乗り越えた、本物の愛で結ばれていたことがわかる。事故後も家族付き合いをされていた婚約者に新しくお見合いの話が持ち上がり、涙ながらに田中さんに相談されたそうだ。田中さんは、「愛子はもういないのです。早い方がいい。」と薦められ、婚約者はその方と結婚された。子供さんが生まれてから奥さんと子供さんをつれて、田中さん宅を訪れられた。その時のことを田中さんは、「この奥さん

には、ここが主人の昔の婚約者の家であるとか、同和地区であるとか、そんな思いはみじんもない。私たちが信じきっている。」と綴られている。愛子さんが残してくれたものは、差別なんかものともしない、人と人とのつながり、本物の人間愛だったのかもしれない。生前の愛子さんは本当に素晴らしい人であったのだろう。多くの真実の愛が残された。

そんな思いを胸に、八月十二日、母とともに御巢鷹山に向かった。手記を通じて知り合った田中さんが現地で迎えて下さった。緑に覆われ、川のせせらぎが響く、とても美しい山で、二十五年前の事故を全く感じさせなかった。いよいよ山に登っていくと、所々に小さな墓標が現れはじめた。この事故で命を落とされた方たちの亡くなられた場所だ。一つの所に墜落したはずなのに、山全体に散らばる墓標。墜落時の衝撃の強さが感じられた。墓標に刻まれた一人ひとりの名前。赤ちゃんからお年寄りまで、あの日、偶然乗り合わせた飛行機に輝く未来を奪われた人たち。その中に愛子さんの名前が刻まれた墓標を見つけた。線香をお供えし、手を合わせた時、はるばる訪ね、そこにたどりついた実感が足下から伝わる感じがした。同時に二十五年の時の流れは、事故の惨状を覆い隠すように、山を再び緑で覆ったが、ご遺族の悲しみ、心の傷はいつまでも消えないことを感じる旅でもあった。しかし、その遺族の悲しみをえぐり出すような「差別手紙」が田中さんに送りつけられていたことも知った。「航空機事故は被差別部落の田中愛子が乗っていたため起こった。愛子は人間じゃない。穢れた畜生だ。愛子は、五百十九人を殺したテロリストだ・・・。」という内容で。それを読んだ母は怒りで体が震えていた。二〇〇四年の消印。まだ新しい。こんな人が未だにこの世に存在することに、私は許せない気持ちでいっぱいになった。しかし、田中さんは「この人自身に罪はない。差別の歴史をきちんと教えられなかったのだ。偏見だけを植え付けられた犠牲者なのだ。」と一切問題にしなかった。それが精一杯の沈黙の抗議だったのかもしれない。

「一日一生涯」・・・これは今年、墓標の横に安置されたお地蔵さんに刻まれた文字であり、生前愛子さんが残された言葉である。中学校で部落差別を受け、己自身を磨こうと卒業アルバムに寄せ書きされた言葉らしい。差別を許さない生き方、差別を乗り越えた本物の人間愛にたどりつけるよう、私も「一日一生涯」の思いで、一日一日を大切に歩んでいきたい。

この作文は、第二十九回全国中学生人権作文コンテスト（法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会主催）において、法務大臣政務官賞を受賞した作品です。